

北京の三十年

近藤妙子
北京の三十年

新潮社

ベキ ン さんじゆうねん
北京の三十年

定価1000円



印刷 昭和59年11月10日

発行 昭和59年11月15日

著者 こんどうたみこ
近藤妙子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

電話 業務部 (03) 266-5111

編集部 (03) 266-5411

振替 東京 4-808

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

日本音楽著作権協会 (出) 許諾 第8462128
-401号 (157, 158ページ)

© Taeko Kondo, Printed in Japan 1984

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-355301-4 C0023

はじめに

昨年のことですが、毎朝八時十五分になると、私はどんな用事も投げすててテレビの前に坐り、NHKドラマ「おしん」の始まるのを待っていました。人ごとでない「共感」にさそわれたからです。こんなことをいうのは、おこがましい限りですが、「おしん」は内地で、私は中国で経験した苦勞——事情は違っても、その「苦勞」には変りはないと思ったからでした。そしてその苦勞のはてに死んで行った私の主人の運命のあわれさ、激動の時代の、一個人では到底、抵抗しえない非情さ。歴史というのはいかに激動の時代などと割り切ってしまうですが、それに巻き込まれた人間の口惜しさは、私にとっていつまでも忘れることはできません。

私の主人は中国から日本に留学した医学生で、私と結婚後、北京に帰り、日本の敗戦を迎え、蒋介石の国民党の時代を経て、毛沢東の新中国を迎えました。そして中国の社会主義建設のために毛主席の命令通り、医師としての職分に身を捧げたのです。

いつの時代でも日本が好きで、演歌を好んでうたい、焼魚や刺身の味が忘れられず、口ぐせのように、もう一度日本に行ってみたい、そしてマグロの刺身が食べたい、などといっていました。一方、私たちのように日本と関係を持った者は、いつも抗日戦争のどばっちりを受けて小さい顔をしていなければなりません。小、中学校で教える国語のなかにも、図書館にある小説のなかにも至るところに、「帝国主義」「日本鬼」の文字が見え、それを横目で見るたび、私は戦

争を呪ったものでした。

そして文化大革命運動。その嵐の矢面に立たされた主人（と私も）は、日中国交が回復するのを見ることもなく獄中死してしまいました。もう二年頑張っていてくれたなら、好きな日本にも来られたらうし、私たち親子三人は平和に暮らせたのに。北京で一緒に暮らしたお友だち一家は、日本に帰ってたのしく開業しておられる。私たちだって、小さな家であれ、診療所ぐらいは開業できたはずなのですが。

私は今、平和な京都に住んで、東に比叡山、西に愛宕山、北に松ヶ崎、南に京都大学をのぞんで、静かに時を過しています。これらは私に青春時代を想い起させてくれますが、十年前までの北京での冬の時代など全く想像も及ばないほど、のんびりしたたずまいです。日本に帰ってきてよかったと思う反面、主人にもこの平穏を心ゆくまで味わってもらいたかったという悔いに駆られることが再々です。

今年の正月に、京都大学でいっしょだった主人の同級生の方から、新年会をするからとお招きを受けました。場所は大阪のホテルで、八年前の有馬温泉での同級会とちがって、私の方は主人の「名譽回復」も済んだので参加することにしました。同級生の方はもう七十歳を迎え、頭は白髪の人が多くなっていました。関西電力の病院長のほかには私は面識はなかったのですが、その病院長さんに皆様を紹介していただきました。主人が生きていたら、きっと今日の会に出席し、久し振りに逢う同級生と歓談したろうに、と内心思った次第でした。

話では、私の主人は病気で亡くなったのではなく、自殺したのではないかと疑っていた先生もおられたようで、二年前、朝日新聞北京支局の船橋洋一記者が私たちのことを朝日新聞に書かれ

ではじめて事実を知られたとのことでした。その折、ある親切な先生から香奠が送られてきたのを憶い出します。そうした同級生の方々にも知っていただくために、私は自分たちの人生を記そうと思ったのです。また私の女学生時代の同級生も、私が中国人と結婚し、不幸に遭って郷里に帰って来ていることは誰もが知っていますが、私が中国で遭った不幸とはどんな形のものであったかを了解してほしいとつくづく感じたのも、執筆の動機でありました。

友人は皆、私に逢うと、「妙ちゃん、あなた中国で苦労しやあったのやなあー」と慰めてくれますが、私の「苦労」は、金や物質の苦労でなく、何の苦労だったのでしょうか？ その苦労はやはり抗日戦争につらなっているのではないのでしょうか？

もう一つ、牧田諦亮先生（元京大人文科学研究所教授、現聖徳学園岐阜教育大教授、滋賀・念仏寺住職）と奥さんのことがあります。昭和十年（一九三五）六月に中国旅行された先生は、当時、上海市政府勤務の主人の父王長春から一高在学中の長男のことを紹介されたのが、私たち夫婦とのそもその因縁のはじまりでした。主人と牧田先生は京大時代も親友であり、主人が中国に帰ってからも文通がつづき、その交友は亡くなるまで、いや死んでからもつづいています。

主人の父上の霊骨は長い間、先生のお寺でお世話になり、のちに御殿場の霊園に納骨のときも、さらに私の主人もそこに眠っています。そのときも牧田先生にお世話になりました。

私が三十年近くの北京生活から京都に引揚げたとき、やはり一番頼りにさせていたいただいたのも先生で、大小を問わず何事も相談に乗っていただいています。私たち親子にはなくてはならない存在、ありがたい先生です。私が今度この原稿をしたためるときも相談に伺い、先生は喜んで賛成して下さいました。そして文章になっていない私の原稿をこまかく見て下さったのも先生でした。

先生の奥さんも大へんやさしい方でした。先生の元秘書嬢が開店しているビフテキの店へよく

連れて行って下さった。そのやさしい奥さんが癌にかかって亡くなられてもう五年になります。奥さんは浄土まんたら刺繡に忙しいなかでいろいろな本をお書きになったが、私も奥さんにならって一書をしたため、主人と奥さんの霊に捧げたいと思います。

一九八四年七月

近藤 妙子

北京の三十年・目次

はじめに.....	1
-----------	---

第一章 中国人医学生との結婚.....	13
---------------------	----

女学校を卒業して.....	15
---------------	----

主人王和成 ワンフオウセン との出会い.....	18
---	----

父の怒り.....	26
-----------	----

帰 国.....	35
----------	----

北京到着.....	40
-----------	----

一九四五年八月十五日.....	45
-----------------	----

第二章 国民党時代.....	49
----------------	----

国民党時代.....	51
------------	----

国民党の末期.....	55
-------------	----

沈崇事件 センシュウオン	57
-----------------------------------	----

第三章 解放軍の北京入城.....	61
-------------------	----

中共軍の入城.....	63
-------------	----

新中国成立 65

三反運動の犠牲者 70

日本商品展覧会で 73

第四章 北京好日……………77

図書館に勤める 79

待望の里帰り 81

上 陸 87

整風運動 93

大躍進運動と人民公社 96

二度目の里帰り 101

食料買い集め 105

北京好日 108

第五章 文化大革命運動……………113

文化大革命のはじまり 115

ついにわが家の搜索 118

紅衛兵の串連ツラシ(無銭旅行)

123

主人の勾留

130

主人との交信

135

第六章

私の監禁

139

私の勾留

141

虐げられる人々

147

夜のたのしみ

151

李宛君との共同生活

154

釈放後の労働改造

160

第七章

主人の獄中死

165

主人の死

167

革命の余波

171

帰国申請

177

北京よ、さらば

182

日本籍に戻って

188

第八章 名誉回復……………191

再び北京へ 193

主人と私の「名誉回復」 200

談判 206

追悼会 211

装帧
菅木志雄

北京の三十年

第一章

中国人医学生との結婚

